



フランス第二帝政における海軍と植民地：西アフリカを中心に（〈特集〉国際学術学会「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」）

杉本，宗子

(Citation)

海港都市研究, 4:107-121

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81000955>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000955>



フランス第二帝政における海軍と植民地

——西アフリカを中心に——

杉本 宗子
(SUGIMOTO Tokiko)

はじめに

第二帝政期（1852年-1870年）、植民地はそれ以前の3倍に領土が拡大された。この植民地拡大の諸研究において、ハーグリーヴズ（J. D. Hargreaves）は、19世紀末ヨーロッパ列強によってアフリカが分割される以前を中心に、商業的・文化的な接触を通して西アフリカとヨーロッパの関係を解き明かしている。また、サン・マルタン（Y.-J. Saint Martin）は、第二帝政期における西アフリカのフランス植民地セネガルの領土形成を、政治と軍を通して分析していると共に、セネガルの社会的・経済的变化にも言及している。このように第二帝政期の植民地拡大の研究は、主に植民地とヨーロッパの関係そして植民地の領土拡大の過程を対象にしている。しかし、この植民地拡大に大きな役割を担った海軍に焦点をあてた研究、もしくはフランスの海洋戦略から植民地を考察した研究は、まだ未開拓の分野である。海軍自体の研究が未開の分野であった背景には、19世紀のみならず、それ以前にも海軍の問題が歴史研究から無視されてきたことがある [Battesti 1997:2]。また、18世紀以来フランスが伝統的なヨーロッパの問題に対し、海への関心を向けず、そして海軍より大陸の戦争を遂行する陸軍を重視し予算を投入してきたことにも起因するといえよう [Leboucher 1787:10-11]。このように第二帝政期までは、海軍に対して中央の権力の関心の低さに比例して歴史研究においても脇に置かれた状況であった。しかし、第二帝政の海軍についてのバテスティ（M. Battesti）の研究からフランス海軍の研究が少しずつ現れてきた。第二帝政の大きな特徴は、海軍がすばらしい改革の中にあったことであるとバテスティが述べているように、ナポレオン3世の海軍に対する強い関心によって、この第二帝政期は他の時代に例を見ない海軍の発展の時期であったといえよう [Battesti 1997:2]。このような第二帝政期の海軍・海洋戦略を通して植民地拡大を再構築することが本論の目的である。

1 ナポレオン3世の植民地構想

ナポレオン3世が引き継いだ植民地は、北アフリカのアルジェリアを除くと、経済的・戦略的に価値の少ない、しかも本国から遠く、すべての大陸に散らばっているものであった¹。皇帝は、「このように散らばっている植民地は、平和のときにさえ費用がかかる。将来の資源のために必要であるが、フランスの繁栄の代わりにフランスの弱体化の原因となる。将来の商業と戦争基地にとってアルジェリアとギアナのみを必要とするだろう。」と述べ、七月王政の無計画な植民地政策を非難すると同時に自らの植民地に対するビジョンを示した[LN 1854:4]。しかし、第二帝政期において結果的に植民地拡大がなされたのは、ナポレオン3世の政体を正当化するデモンストレーションのためであって、その実態は、植民地の主導権により行われたのだとハーグリーブズは結論づけている [Hargreaves 1963:91]。第二帝政期においてナポレオン3世がどのように自らのビジョンを実施していったのかを検討して諸歴史家の言説を確かめる。

西アフリカにおいて第二帝政初期には、植民地としてセネガルとギニア湾沿岸のガボン、そしてギニア湾に散在する3ヶ所の商館を保持していた(図1)。ガボンは軍艦のための給炭基地・食糧補給基地としての役目を果し、またセネガルには、沿岸にサン・ルイ(Saint-Louis)他2ヶ所の商館とセネガル川沿いに2ヶ所の作物集散所があり、ほとんど沿岸あるいは川のみ支配であった²。しかし、第二帝政末期にはフランス植民地は全体で3倍に拡大した(図2)。このように第二帝政期で植民地が大きく拡大した理由の一つとして、第二帝政期が19世紀中葉の資本主義の発展の時期と重なったため、商人たちが新しい市場や輸出港を見つけて国内の工業品を輸出し、また、工業の発展に伴って需要が増加した油性物質のパーム油・落花生を求めて西アフリカへ進出していったことが挙げられる [Battesti 1997:976]。ナポレオン3世はこのような商業的利益に答えるべく植民地政策を実施していった。先ず、彼が取り組んだのは植民地に大きな責任を負っている海軍の改革である。特に船に対する技術面では、彼自身が参加し、積極的に新しい技術を開発していった [Battesti 1997:255]。第二帝政の海軍施設そして船の技術改革はナポレオン3世に負うところが大きかった。また海軍組織に対しても、海軍・植民地大臣そし

1 アジア(Pondichéry, Karikal, Yanaon, Mahé, Chandernagor), アフリカ(セネガル、西海岸の商館、Réunion, Mayotte, Nosy-Be, Saint-Marie-de-Madagascar), アメリカ(Martinique, Guadeloupe, Guyane, Saint-Pierre-et-Miquelon), オセアニア(Tahiti, îles Marquises)

2 セネガルの商館(Saint-Louis, Gorée, Rufisque) 作物集散所(Dagana, Bakel)

て実際に植民地で従事した経験のある指揮官の協力を得て海軍組織の近代化に取り組んだ。しかし、皇帝のこのように積極的な姿勢とほうらはらに、複雑な行政機構を内包する海軍組織を引き継いだため、十分な近代化を達成できなかったことも事実である [Battesti 1997:257]。すなわち、植民地政策に対して、皇帝と海軍組織の間で隔たりがあったということは推測できる。だからと言ってハーグリーヴズの言説のように、ナポレオン3世の意向が海軍組織に届かず、植民地での政策はすべて植民地の主導権にゆだねられていたのであるか。皇帝のビジョンであるアルジェリアとギアナという植民地の方向性は、海洋戦略の枠組みの中でどのように進められていたのか。

II フランス海軍の海洋戦略

19世紀を通してフランスの海軍戦略の基本的な発想は、ロイヤル・ネイビー（イギリス海軍）とイギリスの海洋支配に対抗し、そして追いつこうとしていたことである [宮下 2006:181]。しかし圧倒的なイギリス海軍を前にして、フランスは常に対英戦争を回避しながら砲艦外交を強いられていた [宮下 2006:185]。このようなイギリス海軍に対峙して、植民地拡大に最も貢献したフランス海軍が、ナポレオン3世の方向性であるアルジェリアとギアナに向けて、地中海、アフリカ西海岸、そして大西洋で、どのような海洋戦略をとったのかを検討する（図3）。

1 地中海における海洋戦略

18世紀以来イギリスはヨーロッパ諸国の領土の配列を常に防衛システムの観点から見ていた [Simms 2008:110-132]。フランスとスペインの両ブルボン宮³に対する防衛としてイギリスは海洋からの戦略をとったのである。それがイベリア半島の南端にありアフリカ大陸に最も接近しているジブラルタル、そしてバルセロナの東に位置するミノルカ島の支配である。この2拠点の支配によって、イギリスはフランスとスペイン両方からの攻撃に対処できると考えたのである。このようなイギリスの海洋戦略の中で、19世紀地中海ではジブラルタル海峡（1815年）、マルタ島（1815年）、スエズ運河（1869年開通、1875年イギリス支配）がイギリスの支配下に置かれていた。フランスは地中海の中でイギリスに完全に封じこめられていた形となっていたわけである。そうした状況の下、フ

3 ス페인継承戦争後のユトレヒト条約でフランス王ルイ14世の孫フィリップがスペイン王を継承しフェリペ5世となった。

ランスは1830年7月にアルジェを征服した [Depeyre 2003:37]。これを契機にフランスは地中海に面した海岸線を広げたばかりでなく、アルジェリアを植民地化していった。1838年10月には、それまでのレヴァント艦隊とアフリカ艦隊を一体化し、地中海に面している軍港トゥーロン (Toulon) を基地とする地中海艦隊が編成され指揮・統制系統の一体化が図られた [Dubreuil 1975:43]。フランス＝アルジェリア間の貿易のために地中海の重要性が増すにしたがって、海軍は貿易航路の安全確保を最大の任務とするようになった [Hamilton 1993:120]。

一方、第二帝政期、ナポレオン3世は、フランスの海軍力を強化するために造船・武装化・修理に責任を負っている海軍工廠の近代化に重点を置いた [Battesti 1997:539]。フランスには海軍工廠を備えた軍港は5ヶ所⁴あり、地中海に面している軍港はトゥーロンのみである (図4)。第二帝政の初期から、この軍港トゥーロンはフランス海洋戦略にとって最重要視され、1857年に水利施設としてトゥーロンに当てられた予算額は5ヶ所の軍港では最も多い37.2%であった [Battesti 1997:540]。このことからみてもナポレオン3世は植民地アルジェリアを地中海の戦略的基地としてそして商業的に価値のあるものとみなしていたと考えられる。

また、第二帝政期では工業の発展に伴い、フランス国内の鉄道網 (図4) が画期的に発展した [Battesti 1997:613]。1860年代になると、フランス国内の各軍港は鉄道網で結ばれ、海軍の人・物の移動が陸路で可能になったのである。地中海の海洋戦略はこの鉄道網によって大きく前進した。ナポレオン3世が目指した植民地の方向性の一つであるアルジェリアは、地中海の海洋戦略の強化と共に、フランスにとって最も重要な植民地の一つとなった。

2 外洋における海洋戦略

フランス海軍は外洋に対してどのような戦略をとっていったのか。イギリスは大洋に拠点のネットワークを作り、ロイヤル・ネイビーはイギリス投資家の望む地域を外部の侵入から守っていた。これに対して、フランスの海軍将校は世界中に存在しているイギリスの拠点に対抗して主導権をとることを試みた。この結果フランスは、無計画で世界中に散らばった拠点を保持するようになったのである。西アフリカでも同様に、1837年から奴隷貿易の監視を口実に、西アフリカ沿岸の指揮官であったウィヨーム (Bouë Willaumez)

4 Cherbourg, Brest, Lorient, Rochefort, Toulon.

が、ギニア湾沿岸の多くの現地の部族長たちと同盟条約を結び、要塞化された商館の建設計画をたてた。1842年8月、イギリスが古い商館の再占拠を表明したのを機会に、七月王政のルイ・フィリップは、1842年12月の法令でガボン、グランバサン (Grand-Bassam)、アシニ (Assinie)⁵の商館建設に多くの予算を投入することを決議した。そして、ウィヨームがセネガル総督になると、沿岸のみの権威を主張した商館政策を放棄し、治安維持と商業利益の向上のために商館後背地を含めた広域征服を主張するようになった [Battesti 1993:33-34]。第二帝政期になると、フランスはアルジェリアにおいて、軍事行動による治安維持と領土拡大に成功したことに誘引されて、セネガルにおいても、同様に軍事支配によって政治を安定させて植民地を拡大していく政策をとった [Newbury 1969:253-276]。同時に、海軍将校たちは、経済発展という背景のなかで、ギニア湾で寄港地獲得に乗り出した [Battesti 1993:33-34]。1849年、自由化された奴隷の植民地として、そして軍艦のための給炭基地・食糧補給基地として沿岸にガボンが建設され、ギニア湾の寄港地の安全の確保に努めた [Hargreaves 1963:136]。1857年には、セネガル沿岸のヴェール岬に海軍基地が整備され、セネガルの領土拡大政策が本格化していくにしたがって、1866年、海軍工廠も併設された本格的海洋基地がダカールに設置された。このダカールの軍港は、セネガル植民地を拡大するための沿岸防衛だけでなく、南アメリカのギアナに向けた戦略でもあった。第二帝政の海洋戦略は、このダカールの海洋基地を中心にフランス本国・セネガル・ギニア湾沿岸・南アメリカのギアナをカバーしていたと考えられる。こうして、植民地に関してナポレオン3世が示した二つの方向性の中の一つ、ギアナに向けての拠点が創られたのである。また、このダカールは南アメリカからの帝国海運郵船会社 (Compagnie des Messagerie) [Charpy 1958:596] の寄港地としての役割を果し、将来のフランス領ギアナへの足がかりとなった。

III 西アフリカにおける植民地拡大

第二帝政期に入り本格的に植民地の領土拡大政策が開始された。西アフリカで実際に植民地に責任を負っている植民地総督はどのように領土を拡大し、貿易の安全を確保していったのか。「西アフリカにおけるフランス植民地の方向性を示したのは、セネガル総督フェデルブ (Louis-Léon-César-Faidherbe)⁶である。それ故、フランスの植民地拡大は

5 Grand-Bassam, Assinie は Côte-d'Ivoire にある。

6 1854～1861年および1863～1865年セネガル総督

植民地の主導権に委ねられていた」と植民地研究者ハーグリーブズは述べている。しかし、海軍・植民地省の書簡の中には中央権力の綿密な指示が見られ、その上、自由裁量の少ない予算から推測して、決して植民地の主導権に委ねられていたのではないとバテスティは反論している [Battesti 1997:976]。植民地において、フェデルブは中央権力の指示の中でどのように彼自身の構想を進めることができたのか。

1 フェデルブの植民地構想

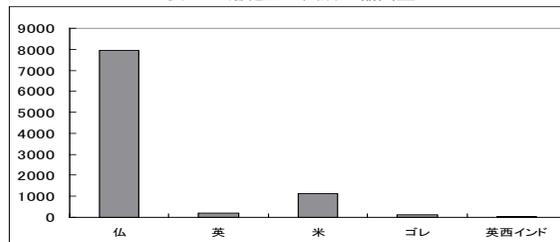
フェデルブの植民地での政策はどのようなものであったのか。フェデルブがセネガル総督に就任して先ず取り組んだことは、要塞を武装化したことである。アフリカの部族長や王国の主権者によって課せられた関税から解放されて川による通商を自由にする、あるいは遊牧民や騒乱を好むものによる略奪から落花生の耕作に従事する農民を守ることが目的であった。このために、セネガルにおいてフェデルブの統治下では、軍事行動が常にあった。約4,000人で編成された遠征隊は、ヨーロッパの海兵隊、セネガル人の騎兵、砲兵隊の小分遣隊、懲治隊の中隊、そして現地人召集兵からなり、フェデルブは、哨戒艇・蒸気推進の小型砲艦からなる小船団を指揮し、軍事行動によって、セネガルの秩序安定と領土拡大を進めていった [Battesti 1997:505]。しかし、フェデルブのこういった軍事行動に最も大きな障害になっていたのはイギリス植民地ガンビアの存在であった。ガンビアはフランス植民地セネガルに囲まれているという特徴により、フェデルブとの戦いに追われた敗者はガンビアを避難と後退の基地として利用した。その上、彼らはガンビア川を、火器を買うための市場としていた。それを防ぐため、フランスは、ガンビアに侵入して彼らを攻撃したいが、それにはイギリスの協力が不可欠となる。フェデルブは、ガンビアを併合して「コンパクトな美しい植民地、セネガンビア」を創ることを目標にするようになった [Bouche 1991:44-50]。1863年、フェデルブは、2度目のセネガル赴任前に将来の西アフリカの植民地構想を皇帝に提出した [Hargreaves 1963:127]。ガンビアを獲得することによって、コンパクトな植民地セネガンビアを組織することができる。セネガンビアを基盤として、ギニア湾に注ぐニジェール川の上流にフランスの権威を広げることが出来れば、ニジェール川の水路を経由してセネガルからギニア湾へのアクセスが可能になる。そのことは将来大きな貿易の利益につながると共に、セネガル沿岸からギニア湾への陸のアクセスを創り、海軍の外洋戦略を強化できると主張したかったのである。この構想を実現するためにガンビアをイギリスから獲得するのと交換に、フランスの関税や航行税によって、イギリスの不満の対象となっていたギニア湾にあるフランスの権威下の

停泊地から撤退することを提案した。そのことによって、たとえギニア湾沿岸の拠点を失っても海洋戦略を弱めることがないという確信のもとでのフェデルブの提案であった。海軍・植民地大臣シャスルーローバ (Justin-Napoléon-Samuel-Prosper de Chasseloup-Laubat) は、フェデルブの提案を支持したが、ギニア湾沿岸の拠点を広めることで海洋の指導権を保持することを期待していた海軍・植民地省の役人たちは、フェデルブの提案に批判的であった。ギニア湾の停泊地のなかでも、特にガボンからの撤退に対しては、有益な基地としていただけに海軍将校たちの抵抗は大きかった。ここに海軍組織の中で、将校・役人たちと植民地の主導権の間の認識の相違と対立が見られたのである。このような役人や将校たちの抵抗により、フェデルブの提案は皇帝には届けられなかった [Hargreavse 1963:127]。しかし、フェデルブの構想は、続く第三共和制へと彼の後継者たちによって引き継がれていった。

2 イギリス植民地ガンビア

フランス植民地セネガルに囲まれているガンビアは、イギリスにとってどのような植民地であったのか。ガンビアは、イギリスが西アフリカに所有している4植民地⁷のなかで、最初にイギリスの権威下に置かれた植民地である。1587年以来、イギリス君主の各種の特権により通商が可能になり、貿易保護のために軍事停泊地としての役目も果していた [Gray 1966:411]。奴隷貿易禁止以後、その監視のためにガンビア川河口に位置するバサースト (Bathurst) に海軍基地が建設された。商業的にも1840年以来、ガンビアは、最も活発な落花生貿易の拠点となった。しかし、この落花生は、ほとんどがフランスの市場によって支配されていた。1857年1月～6月のバサーストから輸出された落花生の国別の輸出量を比較すると、フランスの占める割合が85%に上っている (表1)。

表1 落花生の国別の輸出量

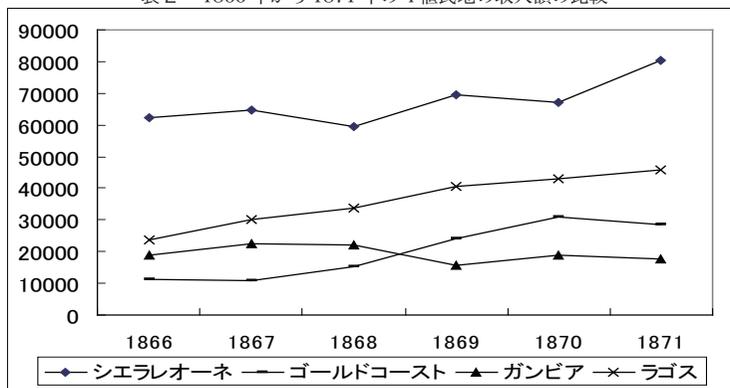


([Colonial Possessions 1858:p. 184] より著者作成) (単位: トン)

7 ガンビア、シエラレオーネ (Sierra Leone)、ゴールドコースト (Gold Coast)、ラゴス (Lagos)

また、西アフリカのイギリスの4植民地の経済状況を比較すると、決してイギリスにとって重要な位置を示していない(表2)。

表2 1866年から1871年の4植民地の収入額の比較

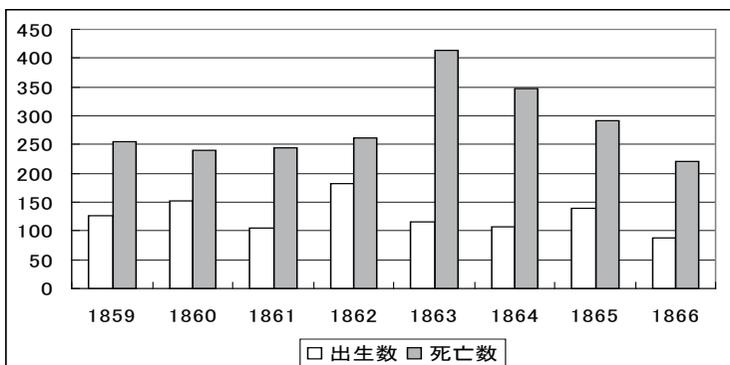


([British Parliamentary Paper 1970:p. 460] より著者作成)

(単位: £)

このような貿易停滞の最も大きな原因は、ガンビア川沿岸の部族国家間の争いである。フランスの軍事制圧によって、ガンビアに追われた現地部族がこの争いに拍車をかけていた。そして、定期的に襲ってくる伝染病の流行も部族の争いと同様に貿易にとって大きな弊害となった。1859年から1866年のバサーストにおける出生数と死亡数を比較すると、常に死亡数が上回っていることが分かる(表3)。

表3 1859年～1866年の出生数と死亡数



([Colonial Possessions 1867:p. 16] より著者作成)

このようにガンビアは、商業的にイギリスに貢献しているとは言い難く、その上秩序混乱

による軍の出動のための出費で、常にイギリス議会の不満的になっている植民地であった。

3 ガンビアのイギリスからフランスへの譲渡交渉からみる両国の戦略

1860年1月27日、イギリスとフランスの間で結ばれた英仏通商条約は、両国の関税の不公平による不満、特にイギリスによる不満が解消されたばかりでなく、西アフリカにおけるイギリスとフランスの関係にも良い影響を及ぼした。すなわち、植民地貿易のための安全確保の協力が両国の間で約束されたのである [Hargreaves 1963:108]。この両国友好の関係の中で、イギリス植民地ガンビアをフランスに譲渡するという提案が、ガンビア総督からイギリス政府に出された [Hargreaves 1963:136]。フェデルブのビジョンが実現する機会が訪れたのである。1859年にガンビアを襲った落花生の凶作と伝染病の流行という厳しい状況の中から出てきたガンビア総督の提案であった。総督は、ガンビアをフランスに譲渡する交換にフランス植民地ガボンを獲得するという提案をしていた。イギリスにとって、フランスの軍艦の寄港地を獲得することは、フランスの植民地拡大の脅威を弱めると同時に、フランスの海洋支配を弱めることにつながる。こういったイギリス側の思惑を認識したからこそ、フランスの艦隊の司令官たちは抵抗したのである。しかし、イギリス政府は、このガンビア総督の提案であるガボンより商業価値のあるフランスの貿易拠点メラコレ川 (Mellacorées) を主張した [Hargreavse 1963:140]。メラコレ川はイギリス植民地シエラレオーネに隣接し、1860年代から落花生貿易で成長していた地域である。1865年の部族長の継承戦争をフランス海軍が鎮圧し、フランスの保護領となった植民地であった [Hargreaves 1963:131]。このメラコレ川をイギリスが獲得することは、商業利益はもちろんのこと、フランスのシエラレオーネへの拡大を防ぐことにもなるのである。ガボンに対して関心を示さなかったのは、蒸気船の普及と常に優位にあるロイヤル・ネイビーの海洋戦略にたいする自信の現われでもあったといえる。最終的に1870年3月ガンビアとメラコレ川の交換が両国で同意されたが、その準備に入った段階で、ガンビアの原住民やガンビアに拠点を置くイギリス商人の反対という理由でこの交渉はイギリス側から打ち切られた [Hargreaves 1963:164]。

しかし、1870年7月15日イギリス上院議会で取り上げられたガンビア譲渡問題の討論 [Hansard 1870:339-342] から、交渉中断の真相が見えてくる。イギリス植民地大臣は、ガンビア譲渡支持の根拠として、ガンビアの商業的価値の低さと社会的治安不安のための軍事経費の増強を強調している。つまり、イギリスの植民地政策の基本である、あく

までも経費をかけずに貿易拠点を拡大する(非公式帝国)という考え方に即したものであった。これに対し、ガンビアで貿易に参入している商人を代表して上院議員マンチェスター公は、「もしガンビアがフランスの支配下になると、全西アフリカ海岸におけるイギリスの貿易の発展に影響するだろう。ガンビア放棄が、イギリスの西アフリカ植民地放棄への第一歩になるだろう。」と主張した。もしガンビアがフランスの権威下におかれると、フランスが西アフリカにおける海洋の指導権を広げ、同時に西アフリカの商業的指導権までも広げていくことになる。つまり、イギリスにとってガンビアをフランスに譲渡することは海洋の指導権と貿易の指導権を失うことになるという危惧がマンチェスター公の主張から見て取れるのである。

おわりに

18世紀以来、イギリスは、海洋戦略の優位を背景にしてヨーロッパとかかわりをもってきた。一方、フランスは、常に第2位の海軍力でイギリスとの戦いを避け、しかし、イギリスに追いつこうとしていた。19世紀末から始まる英・仏植民地拡大競争を前に、ナポレオン3世は、イギリスの海洋戦略に対峙しながら、フランスの海洋戦略の枠組みのなかでアルジェリアとギアナをフランスの最も重要な植民地であると位置づけた。アルジェリアは、商業はもちろんフランスの地中海海洋戦略にとって大きく貢献できる植民地であった。そしてギアナに向けては、セネガル植民地が重要な位置を占めていた。セネガルを中心に、本国、ギニア湾、そしてギアナに向けた海洋戦力網が作られるのである。つまりナポレオン3世の構想の中に植民地セネガルが存在していたのである。西アフリカのセネガルに注目した場合総督フェデルブの主導権は大きく浮かび上がってくる。フェデルブは、セネガルの商業的繁栄、そしてそのためのセネガルの安定に向けて自らの構想で植民地を拡大する政策をとっていった。そのことが、植民地拡大が植民地主導権によってなされたとのハーグリーブズの結論、そしてバテスティの反論へとつながっている。しかし、ナポレオン3世の描いたフランスの外洋戦略の中でセネガルを考えると、フランスの植民地政策が植民地の主導権に委ねられていたと単純には結論づけられないし、また植民地拡大をナポレオン3世の単なる政体のデモンストレーションとは決していけない。セネガルをフランス海洋戦略の重要な位置と認識したからこそ、イギリスはガンビア譲渡に抵抗したのである。西アフリカにおけるイギリスの貿易と海洋の指導権の喪失を明らかに危惧していたと推測できる。このガンビア譲渡交渉は、19世紀中葉に起こった単なる

一植民地の譲渡ではなく、フランス・イギリス両国にとって、西アフリカの海洋戦略そして貿易の指導権を左右するものだったのである。

参考文献

史料

British Parliamentary Papers : Annual Reports on The State of the Colonies 1848-72, Irish University Press Shannon Ireland, 1970.

Hansard's Parliamentary Debates, 3rd Series : commencing with the accession of William IV, 1870.

Napoléon III, *Œuvres de Napoléon III*, t. 2, Amyot, Paris, 1854. (LN1854)

The Reports : The Past and Present State of Her Majesty's Colonial Possessions (transitted with The Blue Books, For the Year 1856, 1865), London, 1858, 1867.

二次文献

Battesti, M. 1997, *La Marine du Napoléon III : Une politique navale*, 2 vols, Service historique de la marine, (Thèse d'histoire, Université de Savoie, Décembre 1996)

Battesti, M. 1993, *La Marine au XIXe Siècle : Interventions extérieures et colonies*, Paris.

Bouche, D. 1991, *Flux et Reflux(1815-1962)*, *Histoire de la Colonisation Française*, Paris.

Charpy, J. 1958, *La fondation de Dakar(1845-1857-1869)*, *Collection des documents inédits pour servir à l'histoire de l'Afrique occidentale française*, Paris.

Depeyre, M. 2003, *Entre vent et esu, un siècle d'hésitations tactiques et stratégiques 1790-1890*. Paris.

Dubreuil, J.-P. 1975, *Les transformations de la Marine française en Méditerranée(1830-1860)*, Thèse de Doctorat de 3e cycle, Université de Nice.

Gray, J. M. 1996, *A History of the Gambia*, London.

Hamilton, C. I. 1993, *Anglo-French Naval Rivalry 1840-1870*, Oxford University Press.

Hargreaves, J. D. 1963, *Prelude to the Partition of West Africa*, London.

Leboucher, O.-J. 1787, *Histoire de la dernière guerre, entre la Grande-Bretagne, et les Etats-Unis de l'Amérique, la France, l'Espagne et la Hollande, depuis son commencement en 1775, jusqu'à sa fin en 1783*, Paris.

Newbury, C. W., Kanya-Forstner, A. S. 1969, "French Policy and The Origins of The Scramble For

West Africa”, *Journal of African History*, 10 (2), pp. 253-276.

Simms, B. 2007, “Ministers of Europe : British strategic culture, 1714-1760”, Hamish Scott and Brendan Simms(ed.), *Cultures of Power in Europe during the Long Eighteenth Century*, Cambridge University Press, pp. 110-132.

宮下雄一郎 2006 「第6章フランス海軍とパクス・ブリタニカ」 田所昌幸編 『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』 有斐閣

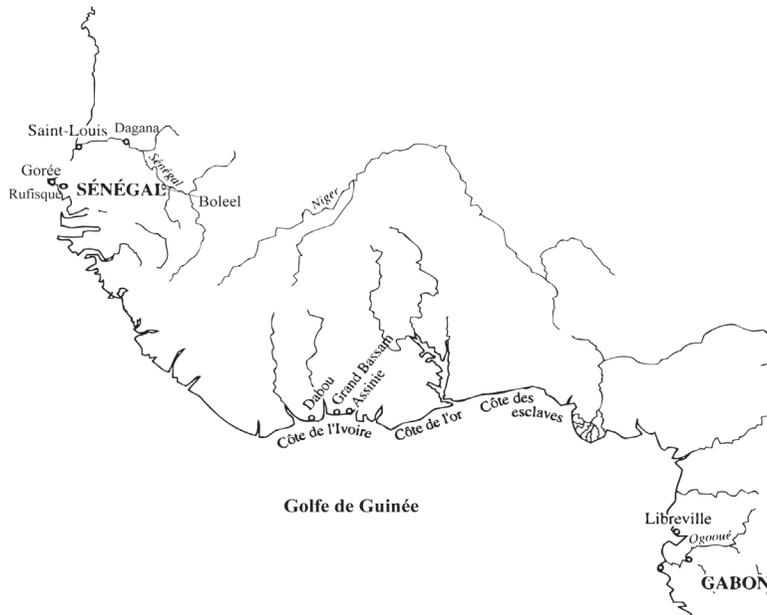


図1 第二帝政初期：西アフリカ植民地（セネガル、ガボン）と商館（〔Battesti 1997:979〕に著者加筆。）

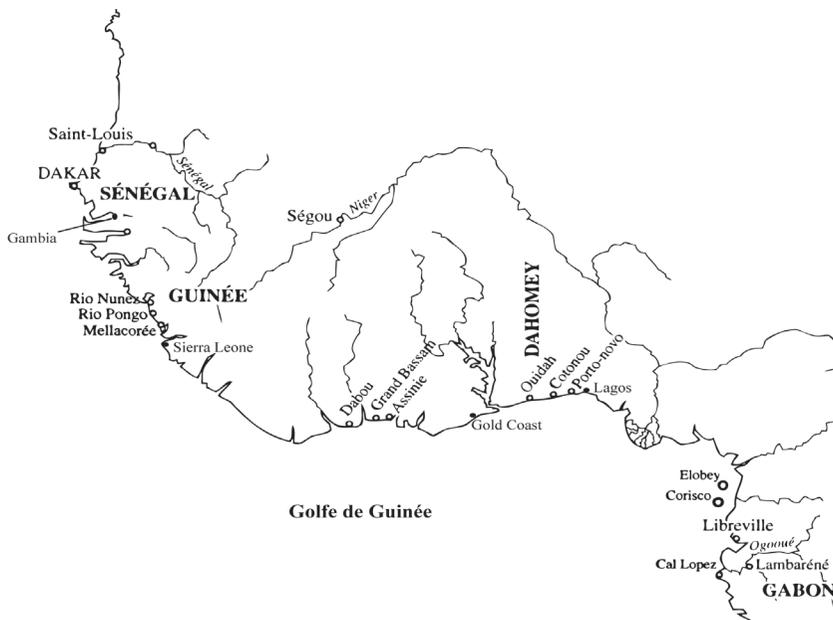


図2 第二帝政末期：フランス植民地と商館（○）、イギリス植民地（●）（〔Battesti 1997:979〕に著者加筆）



図3 フランスの海洋戦略：フランス支配 (○)、イギリス支配 (●) [著者作成]

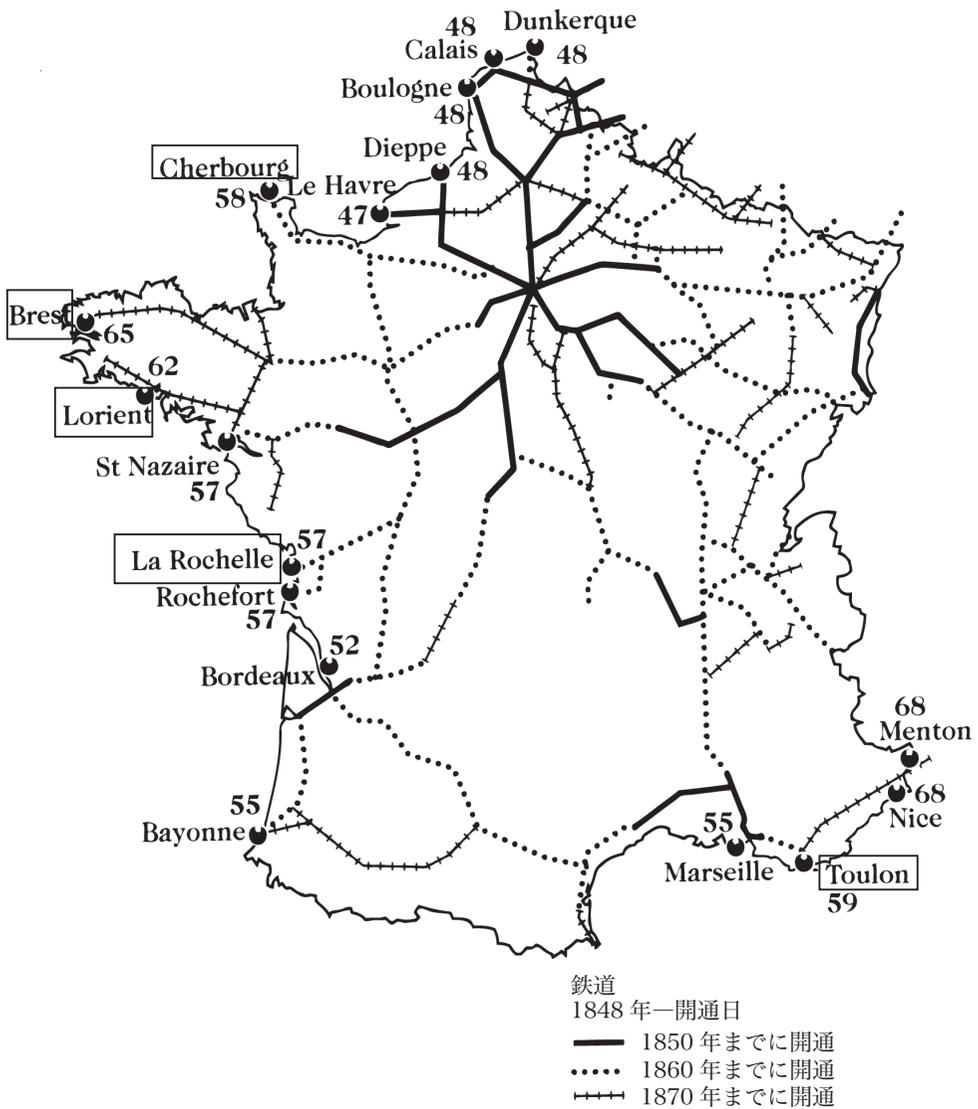


図4 第二帝政期のフランスの軍港(□)と鉄道網 ([Battesti 1997:613] に著者加筆)

(神戸大学大学院人文学研究科)